



地域概要

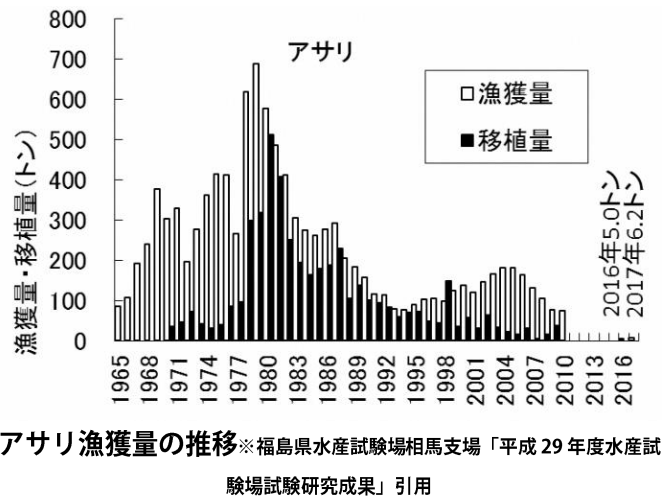
松川浦は福島県相馬市にある汽水湖で、砂州により太平洋と隔てられた南北5 km、東西3 km、面積6.06 km²、最大水深約5mの細長い入り江である。湾には河川が流入しており、豊富な栄養塩が供給される環境であるため、ヒトエグサ養殖やアサリにとって優良な漁場となっている。また、アマモ場も広くみられるため、様々な水産物や幼稚魚等の成育の場として重要な水域にもなっている。一方で、海との接続は北側にある幅約80mの水路部分のみであるため海水の交換率が悪いという問題が存在する。そのため、大雨等により長期に亘って塩分が低下することがあり、生息する生物に大きな影響を及ぼすことがある。



活動の背景

松川浦でのアサリ漁獲量は、1979年の約700トンピークに減少し、1994年に77トンまで落ち込んだ。その後、漁獲量は一度回復傾向を示すものの、再び減少に転じ、東日本大震災の津波によりアサリ資源はほぼ壊滅した。しかし、2016年から試験的な操業が開始され、年間5~6トン程度水揚げされるようになった。

アサリ漁獲量の減少が始まった1980年代後半からカキ礁がみられるようになり、それに伴うアサリ生息環境への影響が懸念され、漁業者が自主的にカキの死殻などの除去を開始した。その後、2004年頃からサキグロタマツメタ（以降ツメタガイと称す）が松川浦全域に分布するようになり、食害の影響が懸念されるようになった。以降、ツメタガイの分布は低下することなく維持されていたため、その対策として除去活動を行うようになった。



活動方針

松川浦におけるカキ礁及びツメタガイの問題は、震災後も続いており、その対策は、現在、平成21年に結成した「相馬双葉漁業協同組合松川浦支所干潟保全協議会」によって継続して実施している。

協議会の体制は、相馬双葉漁業協同組合の松川浦地区の漁業者が中心

であり、漁協職員と県がサポートを行い、活動を進めている。

活動の内容は、毎年会議を開き、年間計画を策定し実施している。

活動実績

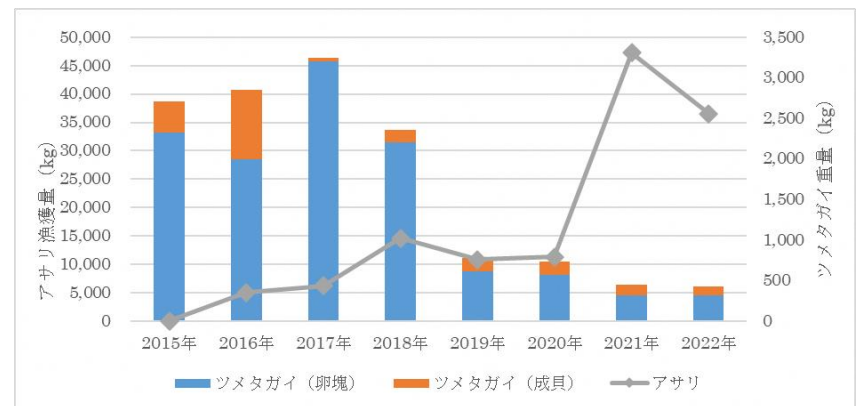
震災前からの課題として、当該干潟ではカキ礁の増加、ツメタガイの増加が挙げられており、その対策としてこれらの除去作業を行ってきた。

震災後においても除去活動は継続している。また、震災の津波による影響で漁場の底質が大きく変化したことから、一部の漁場では覆砂などの取組を行うなど、経年で様々な取組を実施している。現在の取組はツメタガイの成貝・卵塊の駆除、カキ死殻等除去、耕耘を基本とした活動を展開している。

活動は基本的に手作業による人海戦術であるため、重労働かつ人手を要する。そのため、人員に確保が重要となっている。現状では、活動に賛同している漁業者が多く人手は足りているものの、今後、高齢化と共に労働力の確保が課題となる可能性がある。

活動の成果と課題

ツメタガイの駆除量は、2018年までは成貝・卵塊併せて2トン前後であったが、2019年以降、大幅に減少した。更に、2021年以降は前年比の半分程度まで減少し、それに合わせて、アサリの漁獲量が増加している。アサリの漁獲量は、アサリ資源と直結しているとはいえないものの、ツメタガイの減少はアサリ資源の維持に少なからず貢献しているものと考えられる。そのため、ツメタガイの増加を未然に防ぐためにも継続した活動が重要であると考えている。



震災以前はアサリ資源の増加に向けて移植を率先して行い、移植に頼った漁業が行われていたが、震災後はアサリの移植を全くしていない。この状況下でも2017年には卓越年級群のアサリによる高い資源量が確認されたことに加え、2022年には再び資源の増加傾向が確認されている。これは多面的の取組も含めた漁業者による資源保護の取組の成果と考えられる。また、ツメタガイの除去量は減少傾向がみられることから、今後も増加の抑止のための取組を継続することで、アサリ資源のさらなる増加が期待される。

一方で、カキ礁は毎年の除去活動（多面的の活動以外も含め）により10トン以上が回収できているものの、依然として大きく形成されている。そのため、今後はカキ死殻等除去活動の効果を向上させるために、効率的な除去方法を検討する必要があると考えられる。